

子規の俳句と蕪村の発句

Ⅰ 明治三十二年の場合 Ⅰ

柴田 奈美

要約

俳句分類作業を進める中で、特に蕪村の発句を佳しとし、自派の典型とした子規であった。明治二十六年にはあからさまな蕪村発句の模倣を行っていたが、明治三十二年の時点では、蕪村調を感じさせる典型的な作品は大幅に減少していることを明らかにした。論としては、蕪村の作品を自派の典型としつつも、子規自身の作風は蕪村調・蕪村的発想から脱皮しつつあったのが、明治三十二年という時期であった。

キーワード 明治三十二年の子規俳句、蕪村の発句、俳句分類作業

はじめに

明治二十六年の時点の、蕪村の発句を評価し始めた頃には、蕪村の発句の表現や発想を基としたあからさまな模倣の句を相当作っていたことを既に指摘している。^(注一)

本稿では、「俳人蕪村」(明治三十年四月から十一月までの間に、新聞「日本」及び「日本附録週報」に連載)を既に執筆し、蕪村の俳句観の定まった時期であり、「蕪村句集」輪講会を開始して一年を経た時点である明治三十二年における、子規の俳句への蕪村の発句の影響のあり方を明らかにする。

この年の子規の病状は、前年に比べてさらに悪化し、坐る希望も絶える程となる。熱心に続けていた俳句分類作業は、三月以降中断し九月に再開。仕事量は激減するが、「蕪村句集」輪講記録「蕪村句集講義」を欠かさず「ホトトギス」に連載している。蕪村の発句研究への熱意が窺われる。

対象としたのは、明治三十二年作の「俳句稿」に収められた句。九〇三句である。蕪村の発句は、子規の編集した「分類俳句全集」(復刻版「分類俳句大観」日本図書センター 一九九二年四月)を用い、記載されている句集名、巻数、頁数を句の下に記した。

(一) 用語

(1) 野に近き根岸の庭や鵲落し 子規〔子規全集第三卷〕講談社

昭和五十二年十一月二八七頁

以下頁数のみ記す

「日本」(明治三十三年十月二十四日)に「百舌」の題で発表。季題「鵲落し」は、鵲の目を縫い撞木に止まらせ囀とし、別にも竿を傍らに立て近づいたら鵲を捕ること。『分類俳句全集』には、次の蕪村の一句のみ採録されている。

此森もとかく過けり鵲おとし 蕪村〔蕪村句集〕第八卷二七九頁

囀をかける場所を選びかねているうちに、目当てにしていたこの森も過ぎてしまった、との句意。子規の句の場合は、根岸の庭に囀をかけたというもの。野に近い根岸の庭であるから、鵲も庭にやってくるのである。季題「鵲落し」を用いて、全く違う趣の日常吟としている点が指摘できる。

(2) 疱瘡の神へ彼岸詣のついで哉 子規(二四九頁)

「日本」(明治三十四年三月十八日)に「彼岸」の題で発表。お彼岸の日にお寺に詣でたついでに、春によく流行するという疱瘡の神にもお参りし、病気にしないようにお願いしたことだ、との句意。「疱瘡(いも)の神」が珍しい句材で、「乙号」の「疱瘡」の項には、蕪村の次の句のみ挙げられている。

行春や横川へのはる疱瘡の神 蕪村〔蕪村句集〕第十一卷三二三頁

京で流行した疱瘡も、春が過ぎ行くとともに鎮静化していくようだ。疱瘡の神は、叡山三塔の一つの横川へとのぼっていき、疫病神を防ぐ力をもつと

信じられている慈恵大師に退治されるだろう、との句意。

「疱瘡の神」を句材として思いついたのは蕪村のこの句である可能性が高いが、「ついでに(参る)」という発想は、次の古句によるものである。

やぶ入やついてに古き墓参り 青蘿「新五子」第一卷四九五頁

やぶ入りで故郷に帰ったついでに、先祖の古い墓に参った、との句意。

蕪村の句によって珍しい句材を発見し、その他の古句の発想を用いて一句となした作品であろう。

(3) 菊時は菊を売る也小百姓 子規(二九七頁)

「日本」(明治三十三年十一月三日)に「菊・売買」の題で発表。米だけの収入ではやっていけぬ小百姓。今は菊が盛りの季節。家でわずかな土地に作った菊を町にまで売りに行くことだ、との句意。「小百姓」の用語が、蕪村の句に用いられていることは、既に宮坂靜生氏によって指摘されている(『子規秀句考―鑑賞と批評―』明治書院 平成八年九月 三四二頁)。それらの句は『分類俳句全集』に、次のように収められている。

小百姓鶉を取老となりにけり 蕪村〔句集〕第八卷二五九頁

ことしより蚕はしめぬ小百姓 蕪村〔記入なし〕第二卷二七九頁

麦秋や狐の、かぬ小百姓 蕪村〔新花つみ〕第六卷二二六頁

前二句は小百姓の生活が詠まれており、最後の句は狐に憑かれた小百姓が、麦の収穫で忙しい時に奇妙な行動をとる様子を描いたもの。生活のためにできる限りの努力をしている小百姓を詠んだ前二句の影響を子規の掲句は受けたものであろう。

この他に、「小百姓」を詠んだ子規の句は、宮坂氏もご指摘のとおり

り、次の二句がある。

新米を売りにい出でたり小百姓 子規(二九二頁)

「日本」(明治三十二年十月十五日)に「新米」の題で発表。

新米や妻に櫛買ふ小百姓 子規(二九三頁)

「日本」(明治三十二年十月十五日)に「新米」の題で発表。

「芙蓉」(明治三十二年十月)に「東京便り・新米」として

発表。

掲句を含めたこれら三句は、「小百姓」のつましい生活が詠まれているが、宮坂氏は「売買」の視点によって詠まれているところに着目され、次のように蕪村発句の世界との違いを指摘しておられる(「同前」三四三頁)。

「蕪村の『小百姓』には、売買のさまが詠われていない。農村に定住する貧しい農民の姿そのものである。それに対し子規の『小百姓』は、明治の金銭中心の世に翻弄されていく時代のさまが捉えられている」。

蕪村の用語を用いいつも、現実の社会情勢への関心は強く、それが句にも投影されているのであろう。因みに「新米」「今年米」の季題で、次のような句が作られている。

新米の市に出でたる相場かな 子規(二九二頁)

「日本」(明治三十二年十月十五日)に「新米」の題で発表。

瘦村や税の増したる今年米 子規(二九二頁)

(二) 句の構造

(1) 萩伐られ菊枯れ鶏頭倒れけり 子規(三二二頁)

「日本」(明治三十四年二月十八日)に「枯菊」の題、「萩枯れ梅の落葉かな」の句形で発表。

(植物の状態) + (植物の状態) + (植物の状態)

の句の構造は、次の句と同じである。

茨老い芒瘦せ萩覚束な 蕪村「蕪村句集」第八卷三八六頁

庭に植えられた三種類の植物の、それぞれの様子を列挙した形となっている。蕪村は初秋、子規は初冬の植物に着目。蕪村の「萩覚束な」の「萩」にまず着目し、覚束なかった萩が成長し秋に盛りを迎えたが、今は枯れてすっかり伐られてしまっている様子から詠い出されているのである。

(2) 隠れ住む芹生の里や田螺和 子規(二五六頁)

わけあって隠れ住んでいる芹生の里。そこで田螺のあえ物を食べていることだ、との句意。

(どんな) 十の里や十田螺和

の句の構造は、次の蕪村の句の構造によく似ている。

なつかしき津守の里や田螺和 蕪村「蕪村句集」第二卷二八七頁

「津守」は大坂府西成区津守から住吉にかけての地で、歌枕「津守の浦」を「里」と田舎めかし、「積もり」を掛けた技巧的な句。懐かしい田舎の味のいっぱい積もったこの田螺のあえ物であることよ、との句意。謡曲「岩船」の「これも津守の浦の玉、心のごとしと思し召せ」の宝玉を田螺に転じ、田螺のあえ物の珍重さを、かつての津守の浦の宝の玉にも比すべきだ、としたもの。古典の世界を踏まえている蕪村の句に対し、子規の句は「芹生の里」にしたために、

歌枕の伝統はなくなっている。「芹生の里」は次の蕪村の句に用いられており、構造・用語ともに蕪村の句の影響の強いことが指摘できる。

青柳や芹生の里の芹の中 蕪村「蕪村句集」第三卷四十一頁

「俳句稿」には、蕪村の「なつかしき」の句がメモされており、蕪村の句にかなり似かよった句であることを子規自身自覚していたようで、公には発表されていない。

(3) 明月や灯の無き町を通りけり 子規(二八三頁)

晴れた夜空に輝く月が照らしている町は、皆寝静まっており、窓から漏れる灯も無い。そのような町を通っていくことだ、との句意。

(月の状態) + (どんな) 町を通りけり

の句の構造は、次の句と同じである。

月天心貧しき町を通りけり 蕪村「句集」第七卷二七〇頁

句の構造の他に素材、下八字が同じであり、ほとんど同想といつてよい。

(4) 寒月や枯木の上の一つ星 子規(三〇八頁)

寒月が明るく照らしている枯木。その上には一つ星が輝いている、との句意。

寒月や+枯木の(場所)の+(名詞)

の句の構造は、次の句と同じである。

寒月や枯木の中の竹三竿 蕪村「蕪村句集」第九卷三九二頁

「竹三竿」は、京都深草瑞光寺の元政上人の墓標として植えられ

た竹三竿を指す。枯木の林の中に青々とした三本の竹が元政上人の墓標として植えられている。それを寒月が皓々と照らしていることだ、との句意。「寒月や」「竹三竿」の「kan」の響きが呼応している。高潔な僧の人柄が、情景と響きによって描き出されているのである。

これに対し、子規の句は「枯木の上の」に構図を感じさせる情景描写にとどまる句である。句の構造が一致し、素材も「寒月」「枯木」が共通しているため、子規の独創性は感じられない。

(三) 発想

(1) 母方は善き家柄や雛祭 子規(二四八頁)

「新小説」(明治三十二年三月)に「雛祭・選者吟」の題で発表。雛祭に母が嫁入り道具の一つとして持ってきた雛人形を飾った。雛御殿には母方の紋が入れられており、よい家柄であることがわかる、との句意。紋の入った母の持ちものによって母がよい家柄であることを知る、という発想としては、次の句が挙げられる。

更衣母なん藤原氏なりけり 蕪村「新花摘」第十一卷四七九頁

更衣の時に取り出した母の衣服の紋から、母が藤原氏の出であることを知った、との句意。「母なん藤原氏なりけり」は、『伊勢物語』(第十段)の「父はなはびとにて、母なむ藤原なりける」をふまえているが、「けり」として破格。子規は蕪村のこの句の破格に着目し、「俳人蕪村」の中で「調子のいたく異なりたる者」として「句調」の中で取り挙げている(『日本附録週報』明治三十年十月十一日「子規全集 第四卷」六六四頁)。

の峯」と「水なき川」の取り合わせは、「川の水が涸れて雲の峰が現れる」という発想によるもので、蕪村の次の句を発想の土台としている。

雲の峰四沢の水の涸れてより 蕪村「蕪村句集」第四卷一六二頁

前年には、同じ発想で次のような句を作り、発表していた。

犬捨つる川に水無し雲の峰 子規

幽霊の出る井戸涸れて雲の峯 子規

また、「水なき川を渡」って向こう岸に行くという発想は、

橋なくて日暮れんとする春の水 蕪村「蕪村句集」第一卷四七〇頁

とは逆の発想である。浪漫的な詩質をもつ一方で、「水なき川を渡りけり」という現実的な発想も持っている点で、子規の俳風を広くしているのだと考えられる。

(6) 蘭の香や蘭の詩を書く琴の裏 子規(二九五頁)

「日本」(明治三十四年十一月二日)に「蘭花」の題、「酒濁れり」の句形で発表。蘭の花が飾ってある部屋に、蘭の香がたちこめている。その部屋で琴の裏に蘭の詩を書きつけたことだ、との句意。「〜に詩を書く」という発想は、次の句による。

鮮を圧す石上に詩を題すべく 蕪村「新花摘」第四卷四〇九頁

石に詩を題して過る枯野哉 蕪村「新五子」第十卷一九八頁

子規は前年に

鮮の句を題す鮮屋の団扇哉 子規

を作っていた。「鮮の句」と「鮮屋の団扇」の取り合わせに対し、掲句は「蘭」と「琴」の取り合わせであり、貴族趣味的な句風である。

蕪村の句の表現「題す」を用いず「書く」とした点は、蕪村の句につきすぎるのを警戒したためであろうが、「蘭」と「琴」の取り合わせの句の表現としては、格調が落ちる結果となった。

(7) 著馴れたる蒲団や菊の古模様 子規(三〇三頁)

「日本」(明治三十四年一月二十二日)に「蒲団」の題で発表。著馴れた蒲団、それには菊の花の古めかしい模様が描かれている、との句意。蒲団の模様に着目した句としては、

唐くさに牡丹めてたきふとん哉 蕪村「記人なし」第一卷三七頁

がある。この句について、子規は「俳人蕪村」の中で、「蒲団引きあふて夜伽の寒さを凌ぎたる句など古人も言へれ、蒲団其物を一句に形容したる蕪村より始まる」(「日本附録週報」明治三十年九月十三日「子規全集 第四卷」六四九頁)と述べて評価している。蕪村の句は、唐草の牡丹模様の蒲団である。図柄といい仕立てといい、まことに結構な上等な蒲団である、との句意。子規の句は「菊の古模様」とし、使い古した蒲団を詠み、庶民の生活を表している。

(8) お宮迄行かぬ西の市 子規(三〇四頁)

「日本」(明治三十三年十二月二日)に「西の市」の題で発表。お宮まで行かないで、西の市の雑踏の中を帰ったことだ、との句意。「〜に行かないで帰る」という発想は、次の句によるものであろう。

鮎くれてよらで過行夜半の門 蕪村「句集」第五卷三三九頁

よらで過ぐる藤沢寺のもみぢ哉 蕪村「蕪村句集」第八卷三五〇頁

高麗船のよらで過行霞哉 蕪村「蕪村句集」第十二卷二七二頁

の峯」と「水なき川」の取り合わせは、「川の水が涸れて雲の峰が現れる」という発想によるもので、蕪村の次の句を発想の土台としている。

雲の峰四沢の水の涸れてより 蕪村「蕪村句集」第四卷一六二頁

前年には、同じ発想で次のような句を作り、発表していた。

犬捨つる川に水無し雲の峰 子規

幽霊の出る井戸涸れて雲の峯 子規

また、「水なき川を渡」って向こう岸に行くという発想は、

橋なくて日暮れんとする春の水 蕪村「蕪村句集」第一卷四七〇頁

とは逆の発想である。浪漫的な詩質をもつ一方で、「水なき川を渡りけり」という現実的な発想も持っている点で、子規の俳風を広くしているのだと考えられる。

(6) 蘭の香や蘭の詩を書く琴の裏 子規(二九五頁)

「日本」(明治三十四年十一月二日)に「蘭花」の題、「酒濁れり」の句形で発表。蘭の花が飾ってある部屋に、蘭の香がたちこめている。その部屋で琴の裏に蘭の詩を書きつけたことだ、との句意。「〜に詩を書く」という発想は、次の句による。

鮮を圧す石上に詩を題すべく 蕪村「新花摘」第四卷四〇九頁

石に詩を題して過る枯野哉 蕪村「新五子」第十卷一九八頁

子規は前年に

鮮の句を題す鮮屋の団扇哉 子規

を作っていた。「鮮の句」と「鮮屋の団扇」の取り合わせに対し、掲句は「蘭」と「琴」の取り合わせであり、貴族趣味的な句風である。

蕪村の句の表現「題す」を用いず「書く」とした点は、蕪村の句につきすぎるのを警戒したためであろうが、「蘭」と「琴」の取り合わせの句の表現としては、格調が落ちる結果となった。

(7) 著馴れたる蒲団や菊の古模様 子規(三〇三頁)

「日本」(明治三十四年一月二十二日)に「蒲団」の題で発表。著馴れた蒲団、それには菊の花の古めかしい模様が描かれている、との句意。蒲団の模様に着目した句としては、

唐くさに牡丹めてたきふとん哉 蕪村「記人なし」第十卷三七頁

がある。この句について、子規は「俳人蕪村」の中で、「蒲団引きあふて夜伽の寒さを凌ぎたる句など古人も言へれ、蒲団其物を一句に形容したる蕪村より始まる」(「日本附録週報」明治三十年九月十三日「子規全集 第四卷」六四九頁)と述べて評価している。蕪村の句は、唐草の牡丹模様の蒲団である。図柄といい仕立てといい、まことに結構な上等な蒲団である、との句意。子規の句は「菊の古模様」とし、使い古した蒲団を詠み、庶民の生活を表している。

(8) お宮迄行かぬ西の市 子規(三〇四頁)

「日本」(明治三十三年十二月二日)に「西の市」の題で発表。お宮まで行かないで、西の市の雑踏の中を帰ったことだ、との句意。「〜に行かないで帰る」という発想は、次の句によるものであろう。

鮎くれてよらで過行夜半の門 蕪村「句集」第五卷三三九頁

よらで過ぐる藤沢寺のもみぢ哉 蕪村「蕪村句集」第八卷三五〇頁

高麗船のよらで過行霞哉 蕪村「蕪村句集」第十一卷二七二頁

(四) その他

(1) 門松に右し左す矢来町 子規(二四一頁)

「ホトトギス」(明治三十二年二月)に「冬の東京・牛込区」の題で発表。門松を置いている門の前を右へ左へと人々が通る。ここはその名も矢来町である、との句意。人々が行き交う様に矢が右へ左へと飛び交うイメージを込めて、「矢来町」で下五を受けたもの。「右し左す」が漢文調であり、次の句からヒントを得たと考えられる。

浅河の西し東す若葉哉 蕪村「新花摘」第十一卷三八頁

「西し東す」をそのまま用いず、「右し左す」とした点が子規の工夫である。

(2) 小坊主や花見の供のひもじ顔 子規(二五九頁)

「日本」(明治三十五年四月二日)に「花」の題で発表。小坊主が花見のお供でやって来ているが、「花より団子」というものか、ひもじそうな顔をしているよ、との句意。蕪村には「顔」を下五に用いる特徴のあることを、子規は「俳人蕪村」(「日本附録週報」明治三十年十月十一日)【同前】六六〇頁(六六一頁)の中で述べている。「顔」の蕪村の句の例として、たとえば次の句が挙げられる。

燕や水田の風に吹かれ顔 蕪村「蕪村句集」第二卷九三頁

川狩や楼上の人の見知り顔 蕪村「蕪村句集」第四卷四三三頁

売卜先生木の下闇の訪はれ顔 蕪村「新花摘」第十二卷十頁

蕪村の句にも「分類俳句全集」の「乙号」の「顔」の項目にも

「ひもじ顔」はなく、子規の創意であると考えられる。

(3) 手に提げし藤土につくうれしさよ 子規(二六四頁)

「ホトトギス」(明治三十二年三月)に「手(春季結)・選者吟」の題、「手に提げて」の句形で発表。藤の枝を伐つてもらって手に提げて歩くと、垂れた藤房が土に着いて擦れる。藤の花房が土に接する感覚が手に伝わるこのうれしさよ、との句意。「うれしさよ」の使用については、「俳人蕪村」の「句法」のところで子規はふれ、「彼に一つの癖ありて或る形容詞に限り長きを厭はず屢々之を句尾に置く」(「日本附録週報」明治三十年十一月二十二日)【同前】六五九頁と指摘。句末に「うれしさよ」と置いた句としては、次の句を挙げている。

つゝ、咲て石うつしたる嬉しさよ 蕪村「句集」第三卷三頁

因みに、子規は明治三十四年には写生の短歌として有名な次の作品を作っている。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゝかざりけり
「墨汁一滴」(「日本」明治三十四年四月二十八日)に発表。

明治三十二年には、空想によって「土につくうれしさよ」と詠んだのである。

同様に、句末に「うれしさよ」と詠んだ句として、次の句をこの年に子規は作っている。

わがわがの接木芽を出す嬉しさよ 子規(二四七頁)

「大帝国」(明治三十三年一月)に「春」の題で発表。自分が施した接木が春になって芽を出した、何と嬉しいことか、との句意。た

だし、古句にはこれとほとんど同様の次の句があることを指摘しておく。

うれしくも去年の接穂の木芽哉 野蝶「桃の実」第三卷二二〇頁

(4) 鴨の子の流れんとする水嵩哉 子規(二七二頁)

「(流) れんとする」が、蕪村調として子規が捉えていた句法。昨年はこの句法を用いて五句作り、そのうち三句を発表していた。それがこの明治三十二年にはこの一句のみの作であり、公に発表されていない点に注目したい。

おわりに

蕪村調を感じさせる句、発想の似ている句を作り、発表もしているが、あからさまな模倣の句はほとんどなくなってきたといつてよい。蕪村の作品を自派の典型としつつも、少しずつ子規自身の作風はあからさまな蕪村調・蕪村的発想から脱皮しつつあることが指摘できる。

注(一) 拙稿「俳句分類作業と子規の俳句―明治二十六年における子規俳句と蕪村発句との比較を中心に―」(『日本文藝學 第三十五号』一九九九年三月 五四頁～六六頁)で指摘した。

(二) 「から草の」の誤まり。「落日庵句集」には「から草の」の句形で所収。『分類俳句全集』には出典名は記されていないが、

句形により「新五子稿」であることがわかる。

引用・参考文献

『子規全集』 講談社 昭和五十年四月～昭和五十三年十月

『分類俳句大観』 日本図書センター 一九九二年四月 (『分類俳句全集』アルス 昭和四年六月の復刻版)

『蕪村全集 二』 講談社 一九九二年五月

『図説俳句大歳時記春』 角川書店 昭和三十九年四月

宮坂静生「子規秀句考―鑑賞と批評―」 明治書院 平成八年九月

一九九九年十一月 一日受付
一九九九年十二月二十二日受理